ローマ人への手紙第八八回質問

５ 肉に従う者は肉に属することを考えますが、御霊に従う者は御霊に属することを考えます。
６ 肉の思いは死ですが、御霊の思いはいのちと平安です。
７ なぜなら、肉の思いは神に敵対するからです。それは神の律法に従いません。いや、従うことができないのです。
８ 肉のうちにある者は神を喜ばせることができません。
９ しかし、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉のうちにではなく、御霊のうちにいるのです。もし、キリストの御霊を持っていない人がいれば、その人はキリストのものではありません。

（ロマ八章五ー九節／新改訳2017）

（問一）新約聖書で「肉」と翻訳されている言葉は様々な意味があります。このロマ八章五節で「肉に従う者」とはどういう意味ですか。どの聖書個所を根拠に正しく説明できますか。

（問二）八章五節で「御霊に従う者」とは誰のことを指していますか。なぜそのように説明できますか。

御霊に従う者

（ロマ八章五ー八節）

この世の中には、二種類の人間しかおりません。それは「肉に従う者たち」と「御霊に従う者たち」です。もちろん、わたしたちが何かを分類する時には、その目的によって、いろいろな仕方があることは事実ですが、神の目から見ると、この二種類の人間しかないのです。

そこで、この重大な二種類の人間を分けてしまう「肉」とか「御霊」とは何かということについて知る必要があるでしょう。「御霊」と訳されたことばは、また「霊」とも訳すことができますので、霊と肉との対比として見ると、人間の霊とからだのことかと思えないでもありません。しかし、「御霊」と訳しておけば、問題の起こる余地はないと思います。

さて、「肉」ということばが、この手紙の中で最初に七章

五節で使われた時説明したように、新約聖書で「肉」[1]ということばが使われている場合、いく通りかの意味で使われています。食べる肉については、原語では全然別のことばが使われていますから、ここでは取り上げません。まず「人間一般」を指す場合があって、それは使徒たちの働き二章一七節で使われています。また、それとの関連で、人間の弱さ、はかなさという点にスポットが当てられている時にも、このことばが使われています。それは、ペテロの第一の手紙一章二四節で使われています。第二に、「からだ」を意味する場合にも使われています。ガラテヤの諸教会への手紙二章二〇節では、このような意味で使われています。ところが、わたしたちが今学んでいる個所で使われているのは、このいずれの場合でもありません。ここで使われているのは、こういう自然のままの肉なのではなく、倫理的な意味を持っています。このことばを正しく理解しようとすれば、どうしても主イエス・キリストが説明しておられるのを聞く必要があるでしょう。それは、ヨハネによる福音書三章六節にしるされてあります。

「肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。」

これは、ニコデモとの会話の中の一節ですが、ここで使われている「肉」ということばは、二つとも原語ではサルクスということばが使われています。しかし、この訳では、意味がよくわからないと思われますので、現代訳聖書を見てみましょう。そこでは、次のように訳されています。

「肉体的誕生しかしていない人は、生まれながらの人にすぎません。御霊による超自然的な霊的誕生を経験した人だけが、生まれ変わった人なのです。」

原語では、同じサルクスということばが、一つの文章の中で二度使われていますが、最初のサルクスは、「肉体」を指しているのに対して、次のサルクスはそうではありません。そして、この二度目のサルクスこそ、わたしたちが今当面しているサルクスの意味にほかなりません。主がここで解説しておられるわけです。そして、この主の解説こそ、「肉に従う者たち」と「御霊に従う者たち」について明るい光を投じてくれるものです。「肉に従う者たち」とは、生まれながらの人々、つまりノン・クリスチャンであり、「御霊に従う者たち」とは、生まれ変わった人々、つまりクリスチャンのことにほかなりません。

この個所を間違って解釈する人々がいることは残念なことです。それは、「肉に従う者たち」を、「肉に従うクリスチャン」と解し、「御霊に従う者たち」を、「御霊に従うクリスチャン」と解し、肉的クリスチャンと霊的クリスチャンについて述べているのだというのです。確かに、聖書のほかの個所で、クリスチャンを未成熟なクリスチャンと成熟したクリスチャンに分け、それを「肉に属する人」と「御霊に属する人」[2]と呼んでいるところがないわけではありませんが、わたしたちが学んでいるこの個所では、そのような区別をクリスチャンの間でしているわけではなく、ノン・クリスチャンとクリスチャンの区別であることを、はっきり知らなければな

りません。

それは、この個所に続く、次の九節で次のように、はっきり教えられているので、間違えることができません。

「しかしながら、神の御霊は、あなたがたのうちに宿っているのだから、あなたがたは肉にあるのではなく、御霊にあるのである。キリストの御霊を持っていない人は、キリストのものではない。」

最初に申しましたように、この世の中には二種類の人しかおりません。クリスチャンとノン・クリスチャンです。クリスチャンは「御霊に従う者たち」であり、ノン・クリスチャンは「肉に従う者たち」です。この「……に従う」[3]というのは、「……のやり方で」とか、「……を生活の方針、基準として」という意味で、「肉に従う者たち」とは、生まれながらのやり方で生活している人で、ノン・クリスチャンを指し、「御霊に従う者たち」とは、うちに宿っている御霊を生活原理として生きている人で、クリスチャンを指しています。

このような言い方によって、二種類の人間がいることを明らかにし、それぞれの行き着く所が違っているというのが、神の目から見た人間の運命にほかなりません。「肉の思いは死であるが、御霊の思いはいのちと平安とだからである。」

このような人間観は、普通一般に考えられている人間観とは全く違っています。一般の人々が考えている人間観は、人間が修養を積むことによって自分自身を向上していき、やがて天国へ入ることができる人格になっていくというものです。しかし、一般に考えられている修養とか自己訓練というもの

は、肉に従った生き方をしているか、御霊に従った生き方をしているかということは全然問題にせず、ただ自分の品性や意志を聖め、また高めようとしています。しかし、聖書が教えていることは、肉に従うか、御霊に従うかということが基本で、これを変えずに、ただ小手先の改変をしてみたところで、それでは、死からいのちに至ることはできないということです。聖書が教えている図式は次のとおりです。

肉に従う者→肉の思い→死、神に敵対する

御霊に従う者→御霊の思い→いのち、平安

このように基本は肉に従うか、御霊に従うかであって、自分の意志や思いをいくら訓練し、修養を積み重ねても、肉に縛られているかぎり、それは悪魔の手中に陥っているのであって、いかに罪と戦っているように見えても、それは、真実、悪魔や罪と戦っているのではなく、そうしたゼスチャーをしているにすぎません。真の解決は、罪の支配力を持った肉から解放され、御霊の支配下に入る以外にはありません。そして、この肉から解放されて、御霊の支配下に入ることを、聖書では救いと言うのであって、これは決して人間が自分の力でできる事柄ではなく、神ご自身の力によるものなのです。「肉に従う者」とは、「肉にある者」であって、これがノン・クリスチャンを指していることは明らかです。そのような人々は「神を喜ばせることができない」のです。「生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。またそれを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきま

えるものだからです。[4]」

このように生まれながらの人は、神の御霊に属することを受け入れず、かえって敵対するのです。そのことは、神の御子キリストが天から降りて、人となられ、この地上生活を歩まれた時のことを考えてみれば、すぐわかります。いったいだれが、この地上を歩まれた神の御子を、神の御子として受け入れたでしょうか。主がご降誕された時、天からの特別な啓示を受けた羊飼たちだけだったではありませんか。主が公けの生活に入れられた時でも、いったい何人の人々が主を主として受け入れましたか。十二使徒でさえも、躓き、主が祭司長たちの手先によって捕えられてしまうと、逃げて行き、主が十字架にかかられた時には、その大半はそこにはいませんでした。その後三日目に、女の弟子たちが墓を訪れ、主の復活の知らせを持って帰って来た時にも、十二使徒たちは、それをばかげたこととして、初めは信じなかったほどです。[5]

このように、神の御霊に属することは、人間的、常識的な目では、決して理解することのできないものなのです。しかし、御霊によってキリストに結びつけられ、生まれ変わらせていただいた者には、よくわかります。ここに、わたしたちクリスチャンが確かに全く別の世界に今生きるようにさせていただいた確かな証拠があると言っていいでしょう。実にクリスチャンとは、御霊に従う者です。そして「御霊に従う者たちは、御霊のことを思い続ける」のです。「御霊の思いはいのちと平安」です。

J-ばいぶるGREEK 原書講読画面

ロマ 8:5

οἱ γὰρ κατὰ σάρκα ὄντες τὰ τῆς σαρκὸς φρονοῦσιν, οἱ δὲ κατὰ πνεῦμα τὰ τοῦ πνεύματος.

〈文法解析ノート〉ロマ 8:5

[1] ὁ **οἱ** dnmp+ 冠)主男複 冠詞(この、その)

[2] γάρ **γὰρ** cs 接)従 なぜなら、というのは、すなわち、だから

[3] κατά **κατὰ**（カタ） pa 前） ～から下へ、に従って、によって、に向って、を指して、の間に、毎に

[4] σάρξ **σάρκα**（サルクス） n-af-s 名)対女単 人間、肉体、身体、血のつながり

[5] εἰμί **ὄντες** vppanm-p 分)現能主男複 ある、～である、～です

[6] ὁ **τὰ** danp+ 冠)対中複 冠詞(この、その)

[7] ὁ **τῆς** dgfs 冠)属女単 冠詞(この、その)

[8] σάρξ **σαρκὸς**（サルクス） n-gf-s 名)属女単 人間、肉体、身体、血のつながり

[9] φρονέω **φρονοῦσιν**, vipa--3p 動)直現能3複 心にかける

[10] ὁ **οἱ** dnmp+ 冠)主男複 冠詞(この、その)

[11] δέ **δὲ** cc 接)等位 さて、そして、次に、しかし

[12] κατά **κατὰ** pa 前） ～から下へ、に従って、によって、に向って、を指して、の間に、毎に

[13] πνεῦμα **πνεῦμα** n-an-s 名)対中単 霊

[14] ὁ **τὰ** danp+ 冠)対中複 冠詞(この、その)

[15] ὁ **τοῦ** dgns 冠)属中単 冠詞(この、その)

[16] πνεῦμα **πνεύματος**. n-gn-s 名)属中単 霊

尾山令仁・ローマ教会への手紙講解（ロイドジョンズ・ロマ書講解要約）より

注

(1)「肉」（八・五）と訳されたことばは、原語のギリシャ語では、サルクス（σάρξ）ということばが使われています。

(2)コリント教会への第一の手紙三章一節 新改訳。

(3)「……に従う」（八・五）と訳されたことばは、原語のギリシャ語では、カタ（κατά）ということばが使われています。このことばは、それに続くことばが目的格である時には、それに依拠するとか、合致するとか、調和するという意味があって、「……のやり方で」とか「……に従って」という意味になります。

(4)コリント教会への第一の手紙二章一四節 新改訳。

(5)ルカによる福音書二四章一一節。